200500299A

厚生労働科学研究研究費補助金

長寿科学総合研究事業

高齢者の役割の創造による社会活動の推進及び QOL の向上に関する総合的研究

平成１７年度　総括・分担研究報告書

主任研究者　　芳賀　博

平成 18 年（2006 年）　3 月

目　次

Ⅰ．総括研究報告
高齢者の役割の創造による社会活動の推進及びQOLの向上に関する総合的研究……2
芳賀　博
（資料）「高齢者の健康と役割に関する調査」アンケート調査票

Ⅱ．分担研究報告
1．役割の創造が高齢者の健康度及びQOLの向上に及ぼす影響……27
芳賀　博

2．東北地区における高齢者の担える役割の検討……47
安村　誠司

3．関東における高齢者の役割に関する実態調査……67
新野　直明

4．山村地域での高齢者の役割と健康関連指標の関係……81
高田　和子

5．シルバー人材センター活動の評価に関する研究
－先進センターの事例分析と民間企業のニーズ調査から－……86
杉澤　秀博

Ⅲ．研究成果の刊行に関する一覧表……100

Ⅰ．総括研究報告

厚生労働科学研究費補助金（長寿科学総合研究事業）
総括研究報告書

高齢者の役割の創造による社会活動の推進及び QOL の向上に関する総合的研究

主任研究者　芳賀　博　東北文化学園大学大学院教授

研究要旨

本研究は、高齢者の「役割」の見直しと発掘を行い、役割づくりが地域高齢者の健康度・QOL の向上に果たす役割について明らかにすることを目的としている。以下の結論が得られた。

①高齢者の役割の実態に関しては、群馬及び山梨のデータで検討した。「食事の支度」「洗濯」「掃除」「神仏・仏壇の管理」「留守番・電話番」は、高齢になっても担える役割であることが示された。また、ボランティア活動では、「美化・環境整備」「清掃」が男女とも実施割合が高かった。②高齢者自身が続けたいと思っている役割と非高齢者が高齢者に期待する役割は重なる項目が多かった。中でも「子どもの世話や見守り」対する関心は、高齢者・非高齢者とも高かった。

③高齢者が新たに行なってみたい役割の有無に関連する要因の分析において、社会との関わりをもって生活したいと考えている者は、自立度が低くても、実施の機会に恵まれれば役割を担える人ではないかと考えられた。④高齢者に適した役割をテーマに地区自治会での数回に及ぶ討議を経て、学習的役割（教える・学ぶ）が高齢者に対して設定され、地区の高齢者の約 1/4 の参加を得る事業となった。⑤役割を担うことが健康関連指標と有意に関連することが示された。また、地区の学習的役割プログラムへの参加が、その後の手段的自立や主観的QOLの向上につながることが縦断的なデータにより確認された。⑥高齢者の社会参加の場を提供しているシルバー人材センター事業について、事業の推進・阻害要因や、人材センターの委託もとである民間企業の人材センターに対する評価・ニーズを明らかにした。センターの活動よりもセンターの置かれた地域住民の労働特性や事業所数が少ないなどの産業基盤の特性が、会員の割合や会員一人あたりの契約件数と関係していることが示唆された。また、民間事業所のセンターの利用率は 10%、今後の利用意向は 20%程度とセンターに対するニーズはそれほど高くはなかった。

分担研究者
安村誠司　福島県立医科大学教授
新野直明　桜美林大学大学院教授
高田和子　独立行政法人国立健康・栄養研究所主任研究員
杉澤秀博　桜美林大学大学院教授

A．研究目的

人口の高齢化が進んだわが国のような社会では、単なる長生きよりも人生をいかに充実したものにするかといった生活の質(Quality of life; QOL) に重点が置かれるようになってきた。生命の量から質へ、また物や客観の世界から心や主観の世界を重視する時代に移行してきたともいえる。

平成 12 年度から開始されている高齢者保健福祉施策(ゴールドプラン 21)においても、「介護サービス基盤の整備」に加えて「健康・生きがいづくり、介護予防」等の対策を、車の両輪として推し進めていくことが提唱されることとなった。

しかし、平成 12 年度から開始された同計

画も、現状では介護サービスの基盤整備に重点が置かれ、もう一方の元気高齢者対策の推進は、「かけ声」だけに留まっている観が否めない。以前から元気高齢者対策としては、老人クラブに対する活動支援などが行われているが、これらの施策が高齢者の社会活動や社会参加の促進にどの程度の効果を及ぼしているかについては疑問視する声もあり、その評価もほとんどなされていない。

高齢者の社会活動や社会参加の減少は、役割期待の減少に起因するものであることはよく知られている。従って、社会活動促進のためには、地域で高齢者に担ってもらえる、あるいは担ってもらいたい役割の種類を数多く準備することであり、その発掘と創造は必須である。しかしながら、高齢者の役割創造とその実践への応用に関する実証的研究はほとんどない。

本研究は、「虚弱高齢者」から「元気な高齢者」まで、その体力レベルに応じた「役割」の発掘と開発を行い、これらの実践への応用が地域高齢者の生活機能や健康度・QOLの向上に果たす役割について明らかにすることを目的としている。本研究の実施期間は、平成16~17年度の2年であるが、今年度はその最終年度にあたり、次のような目的を設定した。1）前年度の役割実態調査をさらに補完するとともに、そこから得られた役割一覧をたたき台として調査地区の住民参加型による議論を経て地域特性に応じた役割の見直しや新たな役割づくりを試みること　2）縦断調査に基づき、役割の創造が高齢者の健康度やQOLに及ぼす影響について分析すること　さらに3）社会的役割としての「仕事」を高齢者に斡旋しているシルバー人材センターの調査を通じて、その活性化のための提案を行うことである。

B．研究方法

1．対象地区

本研究の対象となった地区は、1）北海道今金町（芳賀担当）、2）福島県S市(安村担当)、3）群馬県嬬恋村（新野担当）、4）山梨県A村（高田担当）、5）東京都市区シルバー人材センター及び神奈川県下事業所（杉澤担当）である。

2．調査方法

1）北海道今金町

①役割の創造・設定をする対象地区として3つの自治会（大和、南栄、種川）を設定した。地区を選定する際には、町保健師に対して、地区の特性や人材、人間関係等をヒアリングし、地区への接近性や、役割創造・設定の可能性の面を考慮し決定した。

②役割創造・設定に向けた介入：各自治会に対して地区の担当保健師から自治会長を通じ介入の了承を得た後、平成17年4月以降に自治会役員や民生委員、婦人会役員、老人会役員、小学校の校長・教頭、役場サポーター（役場職員）、保健福祉課職員等を構成員とする座談会を数回繰り返した。座談会では主にブレイクスルー型[1]グループワークや地域づくり型[2]ファシリテート法を援用し、質的なデータの整理にはＫＪ法等を使用した。

座談会で得られたデータは、保健福祉課職員で優先順位や実現可能性の観点から整理して、役割案として提示し、さらに、この役割案に関して自治会の役員会など、メンバーを変え、具体的な役割設定にまで繋がるように、議論を繰り返した(図1)。

③役割設定による効果測定：役割設定された地区に対して、前年度と同様の時期に、昨年度の調査の項目から社会参加数及び役割との関連が多く見られたＩＡＤＬ[3]、ＱＯＬ[4]、ＧＤＳ[5]関して同様な質問内容を調査した。対象者は前年と同様、同地区の在宅高齢者とし、地区の保健推進員の協力のうえに、配票留め置き方式にて実施した。また、対照地区として、役割設定に関係しない近隣の自治会（65歳以上の調査対象者計146名）を選び、同様の調査を実施した。

2）福島県S市

（1）役割創造のためのグループワーク

①昨年度、質問紙調査を実施した福島県S市A地区の老人クラブ等に所属する65歳以上の高齢者および地域の健康づくりの会に所属する非高齢者を対象とした。

②グループワークの方法：グループワークは高齢者、非高齢者に分けて地区の公民館で行なった。グループワークの方法は、安梅[6),7)]によるグループインタビュー法およびチェンバース[8)]のワークショップ法を参考に実施した。

③話し合いのテーマ：［高齢者の話し合いのテーマ］ a.. 行ってみたい家の中・地域での役割　b. A地区の高齢者ができる家の中や地域での役割　［非高齢者の話し合いのテ

ーマ] a. 高齢者に行って欲しい家の中・地域での役割 b. A 地区の高齢者に行って欲しい役割とどうしたらその役割を実施できるかの検討

④分析方法：グループワークで記入した付箋紙および録音内容を逐語録に起こしたものから、役割内容を抽出し、類似した内容をまとめ、項目化した。

（2）役割創造を行なう上での条件の検討＜質問紙調査による＞

①対象:昨年度と同様の集団を対象とした。平成18年2月現在において施設入所、死亡、転出した者を除く654人を対象とした。

②調査方法と項目：調査期間は、平成 18 年2月 20 日～3月3日である。郵送法による自記式調査票を用いた質問紙調査を実施した。調査項目は、年齢、性別、同居している家族、健康度自己評価、生活満足度、社会と関わって生活していきたいと考えているかの意向（考え方）、日常生活自立度、活動能力[3]を把握した。役割に関する項目として、昨年度の項目に加えて、今後新たに行いたいことの項目に関しては、地域住民を対象に行ったグループワークで挙げられた主要な項目を加えて把握した。

3）群馬県嬬恋村

①対象:平成 17 年度は同村東部地区の 65 歳以上住民1213名を対象とした。

②調査方法と項目:2005年11月(東部地区)に、高齢者の健康と役割に関する調査表を用いた配票留置き調査を実施した。調査表は、郵送により65歳以上住民に配布し、調査員が各戸を訪問して回収した。調査票の具体的な質問項目は、

a)基本属性:性、年齢、同居者、学歴

b)収入がともなう仕事(シルバー人材センターを除く:有無、種類、今後の希望

c)シルバー人材センターの仕事

d)家庭内の仕事・役割:有無、種類

e)地域の団体活動;有無、役員

f)ボランティア活動:有無、種類、今後の希望

g)身体的・精神的健康:活動能力(老研式活動能力指標[3]、移動能力)、受療状況、転倒歴、抑うつ度(Geriatric Depression Scale:GDS[5])、自立度(精神的自立性尺度[9])

③分析方法:昨年度実施の同村西部地区の回答者 1,194 人と今年度の東部地区の回答者1,017人を合わせた計2,211人を対象として役割の実態に関する分析を行なった。

4)山梨県A村

①対象:山梨県山間部の1村の65歳以上の全住民277名を対象とした。

②調査方法と項目：調査は、2005年12月に調査員による配票留置きによった。調査内容は、高齢者の役割行動として職業行動（収入の伴う仕事（職業）の有無)、家事労働（15項目についての実施状況)、余暇・ボランティア活動（実施の有無)、運動（月に1回以上の運動の実施の有無)、地域の団体・組織活動(16項目の活動への参加の有無)、リーダーシップ（団体・組織での役員・役職数）を取り上げた。健康指標としては、自己効力感[10]、活動能力[3]、精神的健康度（GDS: Geriatric Depression Scale、日本語版）[5]、入院数、通院数を取り上げた。

5）東京都市区シルバー人材センター及び神奈川県下事業所

（1）アウトカム指標の格差の要因・背景

①対象センター：杉澤らが、国庫補助対象センター（30%の抽出確率）に対して行った調査のデータを再解析した[11]。全国249センターからの回答があり、このうち東京都市区のセンター16センターを分析対象とした。

②分析方法：アウトカム指標として「粗入会率」「会員一人あたりの契約件数」「会員一人あたりの契約金額」を用い、センターの施策については、「就業機会の拡大策（外部への働きかけ)」「就業機会の拡大策（会員の技術向上)」「未就業者対策」「ホワイトカラーの就業開拓策」「安全就業推進対策」「健康づくり対策」「レクリエーション・ボランティア推進策」「外部との連携推進策」の8領域について取り上げた。これらの資料に基づき、アウトカム指標と各施策の実行数の相関係数を算出した。

（2）住民の労働特性・産業基盤の影響

①対象センター:東京都区市の49のシルバー人材センターを分析対象とした。

②分析方法：アウトカム指標として、「粗入会率」「会員一人あたりの契約件数」「会員一人あたりの契約金額」を用いた。また、住民の労働特性を評価する指標として、「失業率」「就業者中の一次産業就業者の割合」「就業者中の二次産業従業者の割合」「就業者中の三次産業従業者の割合」を設定した。自治体の産業基盤に関連する指標として、「会員一人あたりの

事業所数」「会員一人あたりの２次産業事業所数」「会員一人あたりの三次産業事業所数」を設定した。これらの資料にもとづき、センターのアウトカム指標と住民の労働特性・産業基盤に関する指標との相関係数を算出した。

（３）質的な調査による分析

①対象センター：東京都市区の 51 センターの粗入会率（2002 年）が 5%以上の上位 5 センターを対象に、センターの職員に対して電話か訪問によるインタビュー調査を実施した。

②分析方法：質的なデータの分析方法の１つである「内容分析法」によって分析した。

（４）民間企業からみたセンターの評価

①調査対象：神奈川県下の常用労働者を5人以上雇用する民営事業所から無作為に抽出した 3,000 事業所であった。

②調査方法と項目：郵送配布・郵送回収であり、実施時期は平成 17 年 5～6 月であった。822 事業所から回答があり、回収率は 27.4%であった。分析項目（従属変数）として、シルバー人材センターに対する認知、利用の有無、利用意向、センターに対する満足度を設定した。また、説明変数としては、業種、企業規模といった属性的な要因、高年齢労働者への施策、高齢就業者に対する認識、経営状況や収益改善の方法を設定した。

③分析方法：シルバー人材センターに対する認知、利用経験、センターに対する満足度、利用意向の各変数の分布が、業種、企業規模、高年齢就業者への施策、高年齢就業者に対する認識、高齢者を採用する際の問題、経営状況、収益改善方法の各変数によって有意に異なるか否かを評価した。

C. 研究結果

1. 北海道今金町における役割創造のための介入

１）創造された役割

住民主体の数回の座談会(図１)を通じ、大和自治会では学習的（教える・学ぶ）役割が高齢者に対して設定された。「寺子屋やまと」という事業で自治会役員が実行委員となり主体的な運営がされた。南栄自治会は自治会・婦人会を中心にして「花いっぱい運動」が企画され、高齢者に対する環境整備に関する役割が創造された。しかし、北海道の季節的な制約もあり、今年度は準備の段階にとどまった。種川自治会は「ボランティア・ナビゲーション・マップ（仮称）」を作成し、ボランティアの客体と主体（高齢者）結びつけることを企画した。

結果として高齢者に対する具体的な役割づくりの設定が、年度中に可能となったのは大和自治会の１地区だけであり。他の自治会は次年度へ向けての準備や自治会関係者のエンパワーメントを試みる段階にとどまった。

２）学習役割の遂行と健康度・ＱＯＬ

大和自治会では学習的な役割設定として「寺子屋やまと」事業が９回にわたって実施された。参加申込者は 42 名であった。地区の元気高齢者の約 1/4 の参加を得る事業となった。この役割設定期間中に前年度と同じような健康度・ＱＯＬ等に関する調査を実施した。

「寺子屋やまと」への参加者、非参加者における役割設定前後のＩＡＤＬ、ＱＯＬ、ＧＤＳの各平均得点を比べたところ、非参加者では役割設定前に比べ、ＩＡＤＬ，ＱＯＬ、ＧＤＳともに、ほとんど変化がないか、減少しているのに対して、参加者の方はいずれの得点も増加の傾向を示し、特にＡＤＬとＱＯＬでは有意な変化が見られた。また、役割設定前後のＩＡＤＬ、ＱＯＬ、ＧＤＳの変化量の平均に関して、参加者と非参加者を比べると、ＩＡＤＬとＱＯＬで有意なちがいを示した。

３）役割設定地区と非設定地区の健康度・ＱＯＬの比較

役割設定のために介入した大和地区と、この地区と年齢構成や社会参加数が似ている近隣地区（対照地区）との比較を試みた。これによると、役割非設定地区の方はいずれも得点減少をしているのに対し役割設定地区はＩＡＤＬとＱＯＬが増加し、有意な差がみられた(表１)。

2. 東北地区における高齢者の担える役割

1)高齢者グループのグループワークから

今後の続けたい家での役割は、炊事・掃除・洗濯なども含めて「家のこと全般」、また「漬物作り・干し柿作り」、「農作業」や「庭木の手入れ」が挙げられていた。この他にも「若い人（家族）の食事の世話」や「孫の世話」、「ペットの世話」なども挙げられた。地域では、「公園や公民館、神社などの清掃活動」、「近隣との交流」、「子どもの見守り・声かけ」、「地区活動への参加・協力」、「伝統芸能」に

関することが挙げられていた。趣味・学習活動では「グランドゴルフ」、「ゲートボール」などのスポーツや「カラオケ」、「町内の人たちとの旅行」を楽しみとして続けていきたいと話していた。また、これらを行う上で、健康づくりもしていきたいと述べていた。

今後新たに取り組みたいことは、「子どもの登下校時の見守り」、「伝統芸能」、「昔の料理・遊び」を若い人や子どもに教えることを挙げていた。趣味・学習活動では、「筋力トレーニング」や「新しい趣味」を挙げていた。

2）非高齢者グループのグループワークから

非高齢者が捉えている高齢者が「現在も行っている役割」は、「家の手伝い」、「畑仕事」、「昔ながらの料理作り」や「若い人が知らないことを教える」、「子どもの安全を守る活動」、「地域活動への参加」、「地域行事への参加・協力」及び「グランドゴルフ」、「ゲートボール」などのスポーツが挙げられた。

期待する役割については、「家事の手伝い」、「野菜作り」などの農作業や「草木の手入れ」、「草むしり」、「留守番」、「電話番」、「家畜の世話」など様々なことが挙げられた。また、「若い人に遠慮せずに意見をいう」や「(若い人に）アドバイスする」、「自分のことは自分で行う」ということも期待されていた。地域では、「地域交流や地域組織活動」に関すること、「子どもに」関すること、「清掃活動」、「文化の伝承」に関することが期待されていた。その他、趣味・学習活動なども通して「元気でいる」、「健康でいる」ことが期待されていた（表２）。

A 地区の非高齢者が高齢者にとくに期待する役割では、Ⅰ・Ⅱの２つのグループが「地域の子どもの登下校時の見守り（パトロール)」を挙げ、もう１つのⅢグループは「放課後、集会所で子どもたちを遊ばせる」ことを挙げていた。どうしたら実施できるかについては、行政や地区の公共機関のバックアップが必要であることが話し合われていた。

3）新たに行ってみたいことの有無に影響する要因(質問紙調査から)

今後新たに行ってみたいことがある者と特にないと答えた者でどのような背景が影響しているのかをロジスティック回帰分析を用いて検討した。その結果、「シルバー人材センター・高齢者事業団の認知度」、「ボランティア活動の有無」、「社会との関わり」、「老研式活動能力指標合計点」が今後行いたいことの有無との関連が認められた。すなわち、シルバー人材センター・高齢者事業団の認知度が「高い」、ボランティア活動は「有」、社会との関わりをもって生活したいと「思っている」、老研式活動能力指標合計点は「高い」などの条件を有している人は、新たな役割を持つことに意欲的であった。

3. 関東における高齢者の役割に関する実態

1)役割に関する実態

今回の調査で調べた役割を、職業労働、家事労働、ボランティア活動、団体・組織活動の4項目に分け、その実態を、性、年齢、移動能力別にまとめた。職業労働:男性の約3割が職業を有し、女性はその半分程度であった。家事労働:男性では「庭・花壇・菜園の管理」と「ごみ捨てやごみ処理」が多く(50%弱)、女性では「洗濯」、「掃除」、「食事の世話」が多かった(80%前後)。家事役割には、女性の従事する割合が高いものが多かったが、「家計・財産管理」と「ペットの世話」は、男性が高い割合を示した。高齢になっても、また、ある程度の介助が必要になっても従事できる割合が高いものとして、「食事の支度」、「洗濯」、「掃除」、「神仏・仏壇管理」、「留守番・電話番」などがあり、特に「洗濯」、「掃除」は、80 歳以上でも約半数が有する役割だった。ボランティア活動:男女ともに「清掃」が最多で、次が「地域美化・環境整備」だった。「清掃」、「地域美化・環境整備」は、年齢が高齢になっても実施率が高い活動であった。団体・組織活動:男女ともに圧倒的に多いのが「老人会・高齢者団体」で、男性では70%、女性では85%が従事していた。「老人会・高齢者団体」は、年齢、移動能力に関係なく従事者率が最も高かった。年齢別では、65-69 歳で約 60%、である以外は、いずれの年齢層でも 80%以上で、年齢が高いほどその割合は高い結果であった。移動能力についても、すべての群で従事している人は 80%以上であり、低下している人たちでその割合が高かった。

2)役割と健康関連指標との関係

健康関連指標として、活動能力(老研式活動能力指標)、精神的健康度(抑うつ度:GDS 得点)、精神的自立度、入院経験(過去一年間の入院経験の有無:あり＝1、なし＝0)、通院数(過去一ヶ月間の通院日数)の5項目を調べ、役割項目との相関を調べた(表3)。活動能力、精神的自立度は、4 種類の役割項目すべてと有意

な正の相関、抑うつ度は全役割項目と有意な負の相関を示した。すなわち、活動能力が高い人、自立度が高い人では、従事する役割数が多く、抑うつ度が高い人では役割数が少ないという結果だった。役割の中では、家事労働と健康関連指標の相関係数が、最も高い数値を呈した。

4. 山村地域での高齢者の役割に関する実態

1)役割に関する実態

家事労働の男性では「庭・花壇・菜園の管理」、「ごみ捨て・ごみ処理」が多く、女性では「食事のしたく」、「洗濯」、「掃除」、「漬物・乾物・味噌作り」の順で多かった。年齢別ではいずれも65~74歳の方が多く従事していた。移動能力別では「障害なくなんでもできる」で従事している割合が多い傾向にあるが、「食事のしたく」、「洗濯」、「留守番や電話番」は「障害あるがほぼ何でもできる」で「障害なくなんでもできる」より多くの人が実施していた。「何らかの介護の必要」な人でも「留守番や電話番」、「家計や財産の管理」には参加していた。

運動は性・年齢・移動能力に関らず、約1/3が行っていた。余暇活動・ボランティア活動は運動実施より少なく、約1/6が行っていた。地域団体・組織活動の状況は、最も多く参加しているのは「老人会・高齢者団体」で「町内会・自治会」がそれに続いた。性・年齢・移動能力での差が大きいものは、「体育・スポーツ」、「趣味・リクリエーション」、「政治関連」は女性より男性、75歳以上より65~74歳、移動能力の高い者での参加が多かった。「地域の文化・祭り」、「退職者団体」は男性と65~74歳で多く、「農協・漁協・森林組合」は男性で多かった。リーダーシップでは男性で「町内会・自治会」、「老人会・高齢者団体」、「体育・スポーツ」、「農協・漁協・森林組合」、「宗教関連」で多く、それらは年齢が若く、移動能力の高いもので多い傾向にあった。

2)役割と健康関連指標との関係

健康関連指標と役割実施数の性・年齢調整による偏相関係数を表4に示した。5%以下の危険率で有意な相関がみられたものは、家事労働が、自己効力感、活動能力、通院日数、入院経験と正の相関がみられた。また団体・組織活動への参加が自己効力感、活動能力と正の相関があり、余暇活動・ボランィアの参加は精神的健康度と負の相関を示した。

5．シルバー人材センター活動の評価

1）アウトカム指標の格差の要因・背景

（1）センターの施策の影響

各種施策（「安全就業対策」、「レクリエーション・ボランティア推進」、「就業機会の拡大策（会員の技術向上）」、「ホワイトカラー就業開拓策」、「健康づくり対策」等）の実行数とセンターのアウトカム指標（粗入会率，契約件数、契約金額）との相関係数を求めた。「安全就業対策」あるいは「健康づくり対策」の実行数が多いセンターでは粗入会率が高い傾向にあることが明らかとなった（$p<0.10$）。「健康づくり対策」の実行数については会員一人あたりの契約件数との間にも有意な相関係数がみられ、この施策の実行数が多いほど会員一人あたりの契約件数が高いことも明らかとなった。

（2）住民・地域特性の影響

「就業者中の一次産業従事者割合」や「就業者中の二次産業従事者割合」が高い自治体では粗入会率が高く、「就業者中の三次産業従事者割合」が高い自治体では逆に粗入会率が低いという傾向がみられた。

産業基盤の評価指標として設定した「会員一人あたりの製造・出荷額」「会員一人あたりの総事業所数」「会員一人あたりの2次産業事業所数」「会員一人あたりの3次産業事業所数」のいずれも、「粗入会率」あるいは「会員一人あたりの契約件数」と有意な負の相関係数が観察され、「会員一人あたりの製造・出荷額」などの指標の数値が高い自治体では、「粗入会率」あるいは「会員一人あたりの契約件数」が低い傾向がみられた。

（3）質的分析

粗入会率が5%以上のセンターを対象にヒアリングした結果、粗入会率が高い理由として次のようなことが指摘された。1つのセンターについてのみ、センターの主体的な働きかけが粗入会率を高めているという発言がみられた。具体的には、60歳になった住民全員に対して個別にダイレクトメールを送付し、その結果として入会者が多くなっているということであった（小金井市）。それ以外の3センターについてはいずれも、入会率が高い理由について、ヒアリングの過程でセンターの活動の特性とともにセンターが置かれている地域の社会的環境、たとえば住民の組織や住民の労働特性あるいは産業基盤が入会率の高さと関係しているという認識が示された。

地域の社会的環境については、「老人クラブが少ない。また、老人クラブに対しては、「年寄りくさい」ということで敬遠する傾向が高齢者には強い。社会参加の受け皿としてシルバー人材センターが位置づいている。」（武蔵村山市）「大きな団地を抱えており、そこでは高齢化が著しい。しかし、定年後の高齢者が従業できるような産業がないため、就業できる機会を探し、それを提供してくれるシルバー人材センターに入会する。」（武蔵村山市）さらに、「代替わりで農業を辞めた、農業出身の人が多く、その人たちは外での仕事が得意」（稲城市）といった地域住民の労働特性が入会者率に関係しているのではないかといった指摘がみられた。

2）民間企業からみたセンターの評価　－評価指標に関連する要因－

センターに対する認知・利用経験・利用意向・満足度のそれぞれの変数の分布が、業種および企業規模によって有意に異なるか否かをχ^2検定によって評価した。業種による差は大きくなかった。企業の常用労働者数別にみると、認知については有意な差がないものの、利用経験や利用意向については有意差がみられ、「5～29 人」という小企業や「300 人以上」という大企業と比較し、「30～299 人」という中企業で利用経験や利用意向をもつ事業所の割合が高かった。満足度についても有意差がみられ、「5～29 人」という小企業で満足度が高い人の割合が低いという結果であった。

表５には、高年齢就業者に対する施策の有無によって、シルバー人材センターに対する認知・、利用経験・利用意向あるいは満足度がどのように異なるかを示した。高年齢者に対する勤務体制や環境整備に取り組んでいる事業所や雇用延長を実施している事業所では、利用経験や利用意向が有意に高いという結果が得られた。また、高年齢就業者に対して「勤勉性」や「協調性」が高いという認識のある事業所では、シルバー人材センターへの利用意向が有意に高いという結果が得られた。

D. 考察

1. 高齢者の役割の実態

高齢者の役割の実態に関しては、群馬県嬬恋村及び山梨県の一山村について検討した。

収入をともなう仕事に従事する者は、男性が女性より多く群馬ではそれぞれ、32%、15%、山梨では 45%、25%であった。これらの傾向は、昨年度の当研究班の成績[12]と類似している。

家事役割では、両地区とも男性では、「庭・花壇・菜園の管理」「ごみ捨てやごみ処理」が多く、女性では「食事の支度」「洗濯」「掃除」等が多かった。また、「食事の支度」「洗濯」「掃除」「神仏・仏壇の管理」「留守番・電話番」(群馬)や「留守番・電話番」(山梨)は、高齢になっても、また、ある程度の介助が必要になっても担える役割であることが昨年同様に示唆されたといえよう。

地域の団体・組織とのかかわりについては、「老人会・高齢者団体」への加入割合が年齢、移動能力に関係なく最も高かった。しかし、実際に参加して活動しているかは疑問であり、その活性化策が問われているといえよう。

ボランティア活動では、「地域の美化・環境整備」「清掃」が男女とも実施割合が高かったが、林[13]の報告でも高齢者に期待できる活動としてあげられている。

2. 高齢者が担っている役割と非高齢者が高齢者に期待する役割

福島県S市A地区における高齢者グループ及び非高齢者グループのグループワークを通じて、高齢者自身が今後も続けたいと思っている役割と非高齢者が高齢者に期待する役割についての検討を行なった。その結果、全体的に高齢者自身による役割遂行への期待は、非高齢者が高齢者に期待するものと重なる項目が多かった。すなわち、家の中では「家事」、「漬物つくり」、「農作業」、「庭の手入れ」、「留守番」、「孫の世話」、地域では「地域の美化・清掃活動」、「地域行事・地域活動への参加・協力」、「地域交流」、「子どもの見守り」、「子どもとの遊びを通した交流」、「伝統文化・芸能の継承」が高齢者は続けたいと考え、非高齢者が行って欲しいと期待する役割であった。いずれにしても「子どもの世話や見守り」に関する役割は、高齢者・非高齢者ともに関心が高い役割であり、次世代を支える『子どもを育てていく』ということが、地域全体の役割として重要視されている結果ではないかと考える。

また、高齢者は今後新たに行っていきたいこととして、次世代の育成に関することを挙げていたのに対し、非高齢者自身も高齢者にもっといろいろ教えて欲しいと期待していた。

平成７年度に総務庁が行った高齢者の生活と意識の国際比較[14]では、日本の高齢者が

家族に貢献している内容として「相談相手（42.5%）」の割合が「家事の担い手（43.1%）」に次いで高かった。高齢者自身も家の中での相談相手としての役割を認識しており、高齢者の重要な役割の１つであるといえる。一方的に教えるということではなく、若い世代と意見交換をしながら、ともに考えていくということが、非高齢者の求める高齢者像なのかもしれない。

また、非高齢者が高齢者に期待する役割として「元気でいること」、「健康でいること」を挙げていたのに対して、高齢者自身も健康づくりに取り組んでいきたいと考えていた。健康でいることも高齢者が望み、若い世代に期待される高齢者の役割の１つであった。このことを広めていくことで、今以上に高齢者の健康づくりに対する意識が高まるのではないかと思われる。

3. 新たに行ってみたい役割の有無に影響する要因

今後新たに行ってみたいことの有無にどのような要因が影響しているのかを検討する目的で、多重ロジスティック回帰分析を行った。その結果、現在のボランティア活動の実施の有無、社会との関わりに関する考え方が大きく関わっており、現在、ボランティア活動を行なっている者ほど、また、社会との関わりを持って生活したいと思っている者ほど、今後行ってみたい役割を挙げていた。日常生活自立度よりも高齢者の考えやこれまでの実施経験が、今後の役割の実施意向に関連していたことは、社会との関わりを持って生活したいと考えている者については、自立度のレベルが様々な状況にあっても実施の機会に恵まれれば、役割を担っていける人々ではないかと考える。また、著明な結果とは言えないが、シルバー人材センター等の認知度も行いたいことの有無に関連する項目として挙げられた。このことは、地域活動に関する関心の高さが高齢者の役割の実施の意向に影響を及ぼす可能性も考えられる。

４．役割創造のための取り組み

北海道今金町においては、昨年度の役割実態調査の結果をもとに、自治会役員や民生委員、婦人会役員、老人会役員、小学校の校長・教頭、役場サポーター（役場職員）、保健福祉課職員等を構成員として、地区の高齢者に適した役割をテーマに座談会を数回繰り返した。その結果、地域の高齢者のための学習的な役割設定として「寺子屋やまと」事業が企画され９回にわたって実施された。この事業の企画は、高齢者自身によるものであり、地区の高齢者がお互いに教えたり、教えられたりするという企画である。

地区への介入プロセスの中で、役割設定を目的として数回の座談会や関係者による協議の機会を多く持ったが、これだけでは具体的な役割設定までの達成は困難であった。最も必要であったのは座談会前後の地区担当保健師の関わりであり、「念押し」や「声かけ」などの保健師から地域住民への日本的な根回しであったように考える。特に座談会後の専門職（保健師）による地区（役員・関係者）への積極的な働きかけがなければ役割設定は困難であった。結果として、介入した３地区のうち１地区で役割設定がされ、他２地区でも役割設定に向けての具体的な動きが起きたことは価値があると考えられる。

5. 役割が健康度・QOLに及ぼす影響

役割と健康度との関連については、群馬と山梨で検討がなされた。群馬では、職業労働、家事労働、ボランティア活動、団体・組織活動への従事が活動能力[3]、精神的健康度[5]、精神的自立度[9]と有意に関連することが示された。中でも、家事労働と健康関連指標との相関係数は、最も高い数値を呈した。山梨でも、役割と健康関連指標との有意な関連が認められたが、とくに家事労働と自己効力感，活動能力との関連は強いものであった。家庭内の役割や仕事は、望んで担うというよりも生活していく上でしなければならないことの方が多いと思われるが、介助を要するような人でも簡単な掃除や留守番など限られた範囲で合っても役割を担っていることが結果として、健康関連指標を高くしている可能性もある。

これらの成績は、横断調査によるものであるため、結果の解釈は仮説の域をでない。そこで、本研究では、北海道において実施された学習役割設定プログラムへの参加者の健康指標やQOL[4]へ与える影響について検討した。その結果、役割創造プログラムへの参加者は、活動能力、ＱＯＬのいずれの得点も有意に増加した。しかし、非参加者では１年前に比べ、これらの指標の得点にほとんど変化が見られなかった。また、役割設定のために介入した地区と、この地区と年齢構成や社会参加数が似ている対照地区との比較から、非設定地区の

方はいずれも得点減少をしているのに対し役割設定地区は活動能力とＱＯＬの増加が確認された。「教える」「学ぶ」といった学習的役割設定が高齢者個々の「手段的自立」の向上といったＡＤＬの面だけでなく、「健康満足感」「人間関係」「精神的健康・活力」の向上といったＱＯＬの面にも効果があることが示唆されたといえよう。本研究の成果は、いわゆる運動を中心とした介護予防的な活動だけでなく、学習的な役割設定が健康度やＱＯＬに影響したという点で、今後の高齢者の介護予防施策に応用できるであろうと考えられる。

６．シルバー人材センター活性化のための条件

シルバー人材センター(以下センターと略)は、高齢者が働くことを通じて収入を得るとともに、健康の保持や生きがいづくりの受け皿として一定の役割を果たしていると評価できる。しかし、昨年度の調査[12]では、センターでの仕事の経験を有する者はどの地区も極めて低かった。センター活性化のための条件を探り、それに向けた条件整備が待たれている。

本研究では、就業機会の拡大策などのセンターの施策の実施状況が、粗入会率や会員一人あたりの契約件数などの格差を十分に説明できないことがわかった。一方、これらのセンターの施策と比較して、自治体の住民の労働特性や産業基盤の方が大きな影響をもっていることが、本研究から示唆された。一次産業や二次産業の就業者が多く、その出身者が多く居住する自治体では、シルバー人材センターの受託する主な仕事、すなわち屋外作業（清掃、除草、農林作業等)、屋内作業（清掃、包装・梱包作業等）とマッチした人材を多く抱えていることから、センターに対するニーズも高く、粗入会率も高くなるのであろうと考えられた。実際、本研究班の福島や群馬の役割の実態分析においても「農作業に関する活動」「清掃」「地域美化・環境整備」等のボランティア活動に従事している割合が高かった。これらのことは、センターが三次産業の出身者の就業ニーズの期待に十分応えられないことも他方では示唆している。

また、量的な分析の結果、「会員一人あたりの製造・出荷額」「会員一人あたりの総事業所数」「会員一人あたりの２次産業事業所数」「会員一人あたりの３次産業事業所数」のいずれも、それらが高い自治体では「粗入会率」あるいは「会員一人あたりの契約件数」が有意に低いという結果が得られた。民間事業所が多く、雇用機会が多い自治体では、高齢者の就業ニーズを満たすという点では補完的な位置にあるシルバー人材センターへのニーズが低下することが示唆されている。

このような事態に直面し、センターがとりうる選択肢としては、受託元として自治体による仕事の創出をより強く求めていくことや、センターに対する民間の需要を新しく創出していくための手だて、たとえば民間の需要の喚起や新しい市場の開拓を図る、会員の能力の向上などに挑戦していく必要がある。

本研究では、シルバー人材センターに対する民間企業からの期待や需要はかなり低いことが明らかとなった。全国のセンターに対する調査[11]では、「商工団体との定期的かつ緊密な連携による就業開拓を行っている」センターが 10.8％と極めて低ことが明らかにされている。センターの民間企業に対する働きかけの弱さが民間企業の認知の低さの１つの要因であるとみることができる。

本研究では、センターの利用意向に影響する要因の分析を通じて、民間事業所による高年齢就業者に対する対策が行われていないことが、センターに対する利用や利用意向が低いことの背景にあることが示唆された。さらに、高年齢就業者に対して「勤勉性」や「協調性」低いと認識している事業所では、人材センターへの利用意向が有意に低かったことから、民間事業所に対して高年齢就業者の労働能力に対する認識の変化を促すような情報を提供することも重要である。

Ｅ．結論

（１）高齢者の役割の実態に関しては、群馬県嬬恋村及び山梨県の一山村について検討した。「食事の支度」「洗濯」「掃除」「神仏・仏壇の管理」「留守番・電話番」は、高齢になっても担える役割であることが示された。また、ボランティア活動では、「地域の美化・環境整備」「清掃」が男女とも実施割合が高かった。

（２）高齢者自身が続けたいと思っている役割と非高齢者が高齢者に期待する役割は重なる項目が多かった。中でも「子どもの世話や見守り」に関する役割に対する関心は、高齢者・非高齢者とも高かった。また、非高齢者

が高齢者に期待する役割として、「元気(健康)でいること」が挙げられていた。

（3）高齢者が新たに行なってみたい役割の有無に関連する要因の分析において、社会との関わりをもって生活したいと考えているものは、自立度のレベルが様々であっても、実施の機会に恵まれれば役割を担っていける人ではないかと考えられた。

（4）地区の高齢者に適した役割をテーマに地区自治会での数回に及ぶ討議を経て、学習的役割（教える・学ぶ）が高齢者に対して設定され、9回にわたって実施された。地区の元気高齢者の約 1/4 の参加を得る事業となった。

（5）何らかの役割を担うことが自己効力感、活動能力、精神的健康度、精神的自立度と有意に関連することが示された。また、地区の学習役割設定プログラムへの参加が、その後の手段的自立や主観的QOLの向上につながることが縦断的なデータにより確認された。

(6)高齢者の社会参加の場を提供する施策の1つであるシルバー人材センター事業について、事業の推進・阻害要因や、人材センターの委託もとである民間企業の人材センターに対する評価・ニーズを明らかにした。センターの活動よりもセンターの置かれた地域住民の労働特性、あるいは事業所数が少ないなど産業基盤の特性が、会員の割合や会員一人あたりの契約件数と関係していることが示唆された。センターの利用率は10%、今後の利用意向は 20%程度とセンターに対する民間事業所のニーズはそれほど高くはなかった。

F．健康危険情報

特になし

G．研究発表

1．論文発表

特になし

2．学会発表

1）斉藤恭平、佐藤美由紀、藤田喜枝子、伊藤弓月、芳賀　博、在宅高齢者の役割実態と健康度・ＱＯＬの関連、第 64 回日本公衆衛生学会（札幌）、2005

2）高橋和子，安村誠司，矢部順子，芳賀博：東北地方における地域高齢者の役割に関する実態把握と性・年齢別の検討，第 64 回日本公衆衛生学会総会，2005 年 9 月，札幌市

3）丸山孝一、新野直明、他:高齢者の精神的自立性尺度の信頼性および妥当性の検討. 第 70 回日本民族衛生学会.東京、2005 年 11 月

4）西田裕紀子、新野直明、他‘地域在住中高年者の抑うつの関連要因－日常活動能力に着目して－.第 12 回日本未病システム学会、大阪、2006 年 1 月

5）Kazuko Ishikawa-Takata, Toshiki Ohta, Noriko Watanabe, Makoto Fujita, Ryoji Takeda, Hirofumi Tanaka. Good appetite and exercise: key factors for predictiong funcitonal independence among community-dwelling elderly. 52st annual meeting, American college of sports medicine. 2005.6.2

6）愈今、長田久雄、芳賀博、髙田和子．高齢者の社会参加に関連する要因の包括的検討．第 47 回日本老年社会科学会．2005.6.17

H．知的財産権の出願・登録状況

特になし

引用文献

1）日比野省三、岩永俊博、吉田浩二：保健活動のブレイクスルー．医学書院、30-71、1999.

2）岩永俊博：地域づくり型保健活動のすすめ．医学書院、79-108、1995.

3）古谷野亘、他：地域老人における活動能力の測定―老研式活動能力指標の開発．日本公衆衛生雑誌、34（3）、109-114、1987.

4）大田壽城、芳賀博、長田久雄、田中喜代次、前田清、他、地域高齢者のためのＱＯＬ質問表の開発と評価、日本公衆衛生雑誌、48（4）、258-267、2001

5）Niino,N.,Imaizumi,T. & Kawakami, N.： A Japanese translation of the Geriatric Depression Scale. Clinical Gerotologist,.10(3)：85-87,1991

6）安梅勅江：ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法．東京：医歯薬出版株式会社，2003

7）安梅勅江：ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法Ⅱ/活用事例

編．東京：医歯薬出版株式会社，2005
8）ロバート・チェンバース；野田直人監訳：参加型ワークショップ入門．東京：明石書店，2005.
9）鈴木征男、崎原盛造：精神的自立性尺度の作成-その構成概念の妥当性と信頼性の検討　民族衛生 69　(2) 47〜56、2003
10）芳賀博．転倒に対する意識・態度の尺度化の試み、地域高齢者における転倒骨折に関する総合的研究（平成 7〜8 年度科学研究費補助金「基礎研究Ａ(1)」研究成果報告書. 124-136. 1997.
11）桜美林大学加齢・発達研究所，『シルバー人材センター活動に関する評価研究』，2004.
12）平成 16 年度厚生労働省長寿科学総合研究「高齢者の役割の創造による社会活動の推進及び QOL の向上に関する総合的研究」報告書（主任研究者：芳賀博）2005.
13）林　幸克：社会教育行政の講座を受講している高齢者の学習意識の検討．高齢者のケアと行動科学，9(1)、66-74、2003.
14）総務庁長官官房高齢者会対策室：高齢者の生活と意識　第 4 回国際比較調査結果報告書. 東京：中央法規出版，136-163，86-91、1997.

研究協力者
齊藤恭平（函館短期大学食物栄養学科教授）
伊藤弓月、本田春彦（東北文化学園大学助手）
島貫秀樹（東北大学大学院医科学研究科障害科学専攻博士課程）
高橋和子（宮城大学看護学部老年看護学）
鈴木直子（福島県立医科大学医学部公衆衛生学講座）
美才治幸子、滝沢里美、土屋純子、干川記江子、野寺美枝、佐藤治子（嬬恋村役場保健福祉課）
丸山孝一（桜美林大学大学院）
渡邊里弥（藍野総合研究所研究員）

図１　各自治体への介入のプロセス

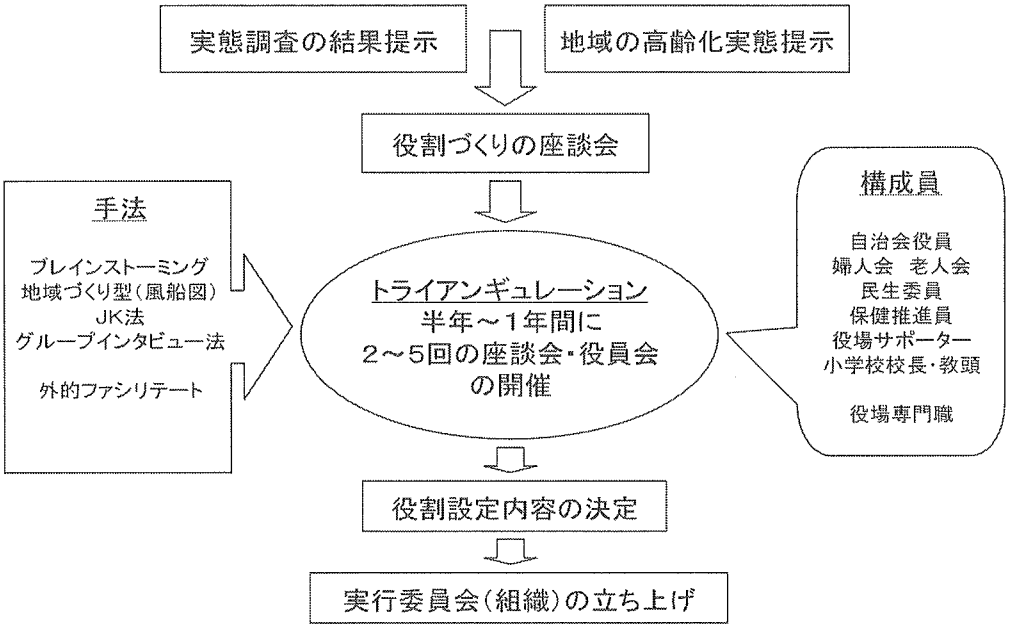

表１　　役割設定地区・非設定地区の健康度・ＱＯＬ関連指標の得点比較

	設定地区 （ｎ＝96）	非設定地区 （ｎ＝117）	T検定 welch 法
年　齢	73.01(6.09)	74.50(5.48)	ns
社会参加数	1.76(2.03)	1.82(2.10)	ns
(前年との差)			
IADL	0.15 (1.03)	-0.16 (1.03)	*
ＱＯＬ	0.11 (2.69)	-0.59 (2.61)	*
ＧＤＳ	-0.29 (3.46)	-0.27 (2.79)	ns

（　）標本標準偏差

表2　非高齢者が捉えている高齢者の役割と高齢者に期待する役割

現在も行っている家での役割	現在も行っている地域での役割	現在も行っている趣味・学習活動
・家の手伝い ・畑仕事 ・花の手入れ ・子どもの心配をする ・祖父母参観 ・孫に小遣いをやる ・昔ながらの料理作り ・若い人が知らないことを教えてくれる	・子どもの安全を守る活動 ・地域活動への参加 ・地域行事への参加 ・地域行事への協力 ・文化・昔の遊びを伝える ・野菜を作って人にあげる	・グランドゴルフ ・ゲートボール ・マレットゴルフ
高齢者に期待する家での役割	**高齢者に期待する地域での役割**	**高齢者に行ってもらいたいその他に活動**
・家事の手伝い ・野菜作り ・庭木の手入れ ・家の草むしり ・ごみ出し ・回覧板をまわす ・漬物作り ・留守番 ・電話番 ・家畜の世話 ・家業を手伝う ・祖父母参観への出席 ・孫の送り迎え ・孫のお守り ・楽しいお話をする(家族を楽しくする) ・家族一人一人のことをチェック(健康など) ・若い人に遠慮せずに意見をいう ・若い人が気づかないことをアドバイスする ・自分のことは自分でする	・地域交流に参加 ・地域の行事に参加 ・地区の役員をやる ・ボランティア活動に協力的になる ・地区のパトロール ・人の話を聞いてあげる ・高齢者同士の交流 ・下校時の子どもを見守る ・地域の子どもたちと遊ぶ ・子どもに昔ながらのことを教える (干し柿、しめ縄作りなど) ・老人会で学校訪問 (竹馬、お手玉、輪投げなど教える) ・昔の遊びを子どもに見せる ・子どもへの声かけ ・地域の子どもの世話・見守り ・児童館活動への参加 ・子育て支援 ・区民館の掃除 ・集会所の掃除 ・神社の掃除 ・地区の花植え ・文化行事・季節の行事の伝承 ・伝統芸能の継承	・今やってくれていることを続ける ・運動能力を維持 ・健康でいる ・元気でいる ・出不精にならない ・寝たきりにならない ・毎日楽しく過ごす ・介護保険などの勉強(施設見学) ・パークゴルフ ・民謡 ・温泉に行く ・友達を持つ ・趣味を持つ

表3　健康関連指標と役割の相関

	職業労働	家事労働	ボランティア	団体・組織活動
活動能力	0.174***	0.391***	0.205***	0.259***
精神的健康度 (抑うつ度)	-0.088**	-0.175***	-0.096**	-0.175***
精神的自立度	0.134***	0.269***	0.198***	0.226***
通院数	-0.009	0.026	0.011	0.070*
入院経験	-0.024	-0.044	-0.034	-0.039

*p＜0.05, **p＜0.01, ***p＜0.001

表4　役割実施数と健康関連指標の偏相関係数

		職業活動	家事労働	余暇・ボランティア	団体・組織活動	リーダーシップ
自己効力感	相関	0.150	**0.469**	0.094	**0.240**	0.065
	有意確率	(0.175)	(0.000)	(0.395)	(0.029)	(0.476)
活動能力	相関	0.079	**0.368**	0.106	**0.258**	0.035
	有意確率	(0.481)	(0.001)	(0.339)	(0.019)	(0.704)
精神的健康度	相関	−0.128	−0.038	**−0.226**	−0.105	−0.031
	有意確率	(0.254)	(0.719)	(0.031)	(0.324)	(0.773)
通院日数	相関	0.027	**0.222**	0.021	0.043	−0.065
	有意確率	(0.811)	(0.044)	(0.854)	(0.701)	(0.478)
入院経験	相関	−0.042	**0.220**	−0.059	0.042	−0.066
	有意確率	(0.707)	(0.046)	(0.599)	(0.708)	(0.468)

性別、年齢調整済み

表5　センターに対する認知・利用経験・利用意向・満足度と高年齢就業者に対する施策実施との関連

	認知が高い事業所の割合	利用経験がある事業所の割合	利用意向がある事業所の割合	満足度が高い事業所の割合	n
就業体制・環境の整備					
あり	53.6	14.3*	30.0**	76.5	243
なし	48.3	8.2	16.6	89.2	506
雇用の延長策					
あり	57.4**	14.0*	26.2*	92.3	197
なし	46.2	8.4	18.7	78.0	530

注1）分析に使用する変数に欠測のあるケースは除いている。nについては、評価指標に欠測を含むケースも含まれている。満足度については、センターを利用した経験のある事業所に限定。

注2）検定は$\chi 2$検定。*; P<.05、**;P<.01。

高齢者の健康と役割に関する調査

この調査は高齢者の健康と役割などに関する調査です。結果は統計的に処理しますので、あなたにご迷惑がかかるようなことはありません。安心してご回答くださるようお願いいたします。

調査責任者　○○○○○　○○○○

質問１　性別と年齢をお答えください。該当する方に○印をつけ、数字を記入してください。

性別は　１.男　　２.女　　年齢は　□　歳

質問２　現在、誰とお住まいですか。住んでいるひとの番号に○印を付けて下さい。

私と･･･　１.配偶者　２.配偶者の父　３.配偶者の母　４.私の母

５.私の父　６.子ども　７.子どもの配偶者　８.孫

９.私の兄弟姉妹　10.その他（誰ですか具体的に　　）

質問３　悩み事など、親しく話をする友人は何人くらいいますか。

□　人くらいいる

質問４　現在、収入がともなう仕事（職業）をお持ちですか。該当する方に○印をつけてください。（シルバー人材センター、高齢者事業団などの不定期な仕事をのぞく）

１.もっている　　２.もっていない

↓

どのような仕事ですか、下の中から選び番号に○印を付けて下さい。

１.自営業（農林水産関係）　　４.会社員・公務員などの常勤の仕事

２.自営業（農林水産関係を除く）　　５.アルバイト･パートなどの非常勤の仕事

３.会社役員　　６.その他（具体的に→　　）

質問５　今後、どのような仕事を（職業）をしてみたいですか。もしあればお書き下さい。

質問６　この３ヶ月の間に、シルバー人材センターや高齢者事業団の仕事をやったことがありますか。該当する番号に○印をつけてください。

１．やったことがある　　２．やったことがない　　３．わからない

↓

どのような仕事ですか？具体的に記入してください

質問７　家の中でどのような役割や仕事をお持ちですか。該当するものすべてに○印をつけてください。（番号の中の、いずれかでもやっていれば○印をつけてください）

１．食事のしたく	９．庭・花壇・菜園の管理
２．洗　濯	10．ごみ捨て・ごみ処理
３．掃　除	11．留守番や電話番
４．家計や財産の管理	12．家業の手伝い
５．孫の世話や保育	13．大工仕事や家の修繕
６．親や配偶者の介護	14．漬物・乾物・味噌づくりなど
７．ペット・家畜の世話	15．その他（具体的に→　　）
８．神棚・仏壇の管理	

質問８　現在の家族内の役割について、あなたはどのくらい満足していますか。該当する番号に○印を付けて下さい。

１．大変満足している　　２．満足している

３．あまり満足していない　　４．満足していない

前の質問で３・４と答えた人へうかがいます

どうして満足していないのですか、その理由をお書きください。

質問９　今後、家族の中でやりたいと思う役割はどんなことですか。もしあれば具体的にお書きください。

質問 10　地域の団体・組織・会との関わりについてうかがいます。あなたは次に上げる団体・組織・会とどのようなかかわりをしていますか。該当する番号に○印をつけてください。

団体・組織・会名	該当するものに○印をつけてください
町内会・自治会	1.入ってない　2.入っている　3.役員
老人会・高齢者団体	1.入ってない　2.入っている　3.役員
婦人会・女性団体	1.入ってない　2.入っている　3.役員
民生委員や福祉関係の団体・組織	1.入ってない　2.入っている　3.役員
保健や食生活改善関係の推進組織	1.入ってない　2.入っている　3.役員
体育・ｽﾎﾟｰﾂ関係指導者団体	1.入ってない　2.入っている　3.役員
趣味やﾚｸﾘｴｰｼｮﾝ関係の会・ｻｰｸﾙ	1.入ってない　2.入っている　3.役員
地域の文化や祭りに関わる組織	1.入ってない　2.入っている　3.役員
農協・漁協・森林組合	1.入ってない　2.入っている　3.役員
商工会・法人会などの商工団体	1.入ってない　2.入っている　3.役員
宗教関連団体・寺の檀家組織	1.入ってない　2.入っている　3.役員
政治関連団体・後援会	1.入ってない　2.入っている　3.役員
戦友会・遺族会	1.入ってない　2.入っている　3.役員